様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２３０９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ２１１９９

研究課題名（和文）脳卒中後遺症者の家事に対する自己効力感の定量化とプログラム開発

研究課題名（英文）Quantification of self-efficacy and program development for household chores of persons with sequelae of stroke

研究代表者
石代　敏拓（Ishidai, Toshihiro）

群馬パース大学・リハビリテーション学部・助教

研究者番号：２０９０８８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，脳卒中後にさまざまな後遺症や困難を経験しながらも家事を行える自信があるかどうかを定量化する尺度の開発を目指した．脳卒中者へのインタビューや文献調査によって項目プールを収集し，家事に対する自己効力感を測定する項目を収集した．これらの検討によって，身体に痛みがあるときでも家事をする自信があるか，手に麻痺があっても家事をする自信があるか，疲れている時でも家事をする自信がある，などが尺度項目として生成された．尺度特性の検討には課題を残しており，今後はさらに分析を進めて信頼性と妥当性の検討を継続していく必要がある．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は，家事に対する自己効力感を定量化する評価法の完成の鍵となる尺度原案を作成したことである．脳卒中を発症した方々の家事の再開や自立には，自己効力感が影響することが経験的にも知られていた．しかしながら，家事に対する自己効力感を定量的に測定する手段はなく，臨床家の勘や推測に頼る状況にあった．本研究はこうした状況を打開し，根拠に基づく実践に寄与するものである．

研究成果の概要（英文）：The present study aimed to develop a scale to quantify self-efficacy of ability to perform housework despite experiencing various sequelae and difficulties after stroke. We collected item pools through interviews with stroke survivors and a literature review, and collected items measuring self-efficacy for housework. Through these investigations, the following items were generated as scale items: "I am confident to do housework even when I have physical pain," "I am confident to do housework even when I have paralysis in my hands," and "I am confident to do housework even when I am tired. The reliability and validity of the scale should be further examined by conducting more analyses in the future.

研究分野：作業療法学

キーワード：脳卒中　家事　作業療法　自己効力感　Self-Efficacy　尺度開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

要介護となる主な原因は，「認知症」（18.7%），次いで「脳血管疾患（脳卒中）」（15.1%）である．要介護状態は，脳卒中等で突然起こることもあるが，ほとんどは家事に支障が出始めることから始まり，家事が困難となると急激に要介護状態に転じることが知られている．家事が困難になる状況を防ぐにはどのようにしたらよいか？それを明らかにするためには脳卒中者側の視点で家事を行なっているかを明らかにすることが重要と考えた．

我々がこの研究に先駆けて実施した脳卒中者を対象とした調査からは，「片手で皿を洗いにくい」,「家族にガスの使用を制限されている」のような家事特有の問題の存在が明らかになっていた．しかし，それらの事象を家事支援に活用する方法の確立には至っていなかった．

そこで我々は，家事に対する自己効力感に着目した．脳卒中後遺症者が在宅復帰後に家事を再開するかどうかには，自己効力感が関係することが示唆されていた．しかしながら，家事に対する自己効力感の測定法や，自己効力感の向上を意図した家事支援に関する報告はこれまで見当たらなかった．そのため，家事に対する自己効力感尺度を開発することで，脳卒中後遺症者が在宅復帰後に家事を再開できるかを予測できると考えた．また，家事に対する自己効力感の測定によって，自己効力感を高めながら家事の遂行や再開を支援することができると考えた．このような背景から，家事支援に活用できる自己効力感尺度の開発し，家事の支援プログラムを開発したいと考えた．

２．研究の目的

本研究は，脳卒中後遺症者の家事に対する自己効力感を測定する評価法の開発と，自己効力感を戦略的に高めながら家事の自立度向上に働きかけるプログラム試行の実施を目的とした．家事の自立に自己効力感が影響することは経験的にも知られている．しかしながら，家事に対する自己効力感を定量的に評価する手段はなく，臨床家の勘や推測に頼る状況である．これでは根拠に基づく実践とは言いがたく，事例データの蓄積も困難である．本研究はこうした状況を打開しようとするものである．

３．研究の方法

脳卒中後の家事に対する自己効力感の開発のため，3 つのステップを踏んだ．まず脳卒中後遺症者への家事支援の事例報告を収集し，家事の遂行や再開を疎外する要因や促進する要因を分析した．次に，地域在住の脳卒中後遺症者へのインタビュー調査によって，家事の遂行が困難なシチュエーションや家事をするための工夫について伺った．最後に，先行研究から既存の自己効力感尺度をレビューし，自己効力感を評価するための項目を収集した．

４．研究成果

事例報告の分析と，脳卒中後遺症者へのインタビューにより，在宅生活において家事を遂行する自信があるかどうかを確認する質問項目群を作成した．この研究は脳卒中後遺症者が家事を遂行するためにどのような要因が影響しているかを検討したものであり，個人の動機や家事を行う文脈的要因などが影響していることが明らかになった．この成果は，第 56 回日本作業療法学会で報告した．

また，先行研究のレビューから，家事に対する自己効力感を確認する質問項目を抽出し，質問文の文言を検討した．これらを統合し，本研究オリジナルの家事に対する自己効力感尺度原案を作成した．この尺度原案には，「身体に痛みがあるときでも家事をする自信があるか」,「手に麻痺があっても家事をする自信があると思うか」,「疲れている時でも家事をする自信があるか」，などが含まれた．この研究成果は現在学術誌に投稿中である．

以上の研究によって作成された質問項目は，リハビリテーションの実践文脈が想定されたものであり，脳卒中を経験した方々が在宅復帰後に家事をする自信があるかどうかを評価し，退院時支援に活用することができるものと考えられる．しかしながら尺度特性の検討には課題を残している．今後はさらに分析を進め，尺度の内容的妥当性の検討，信頼性・妥当性の検討を継続

していく必要がある．また，本尺度は自己効力感を高めながら家事を支援するプログラムにも活用できると考えられるため，引き続きプログラム開発を目指す．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 石代 敏拓，小林法一
２．発表標題 家事に困難さを感じている脳卒中後遺症者の作業選択に関する研究 ー家事の遂行に焦点を当てた分析ー
３．学会等名 第56回日本作業療法学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関